

No.128

1999.  
12.28

# 岐阜の博物館

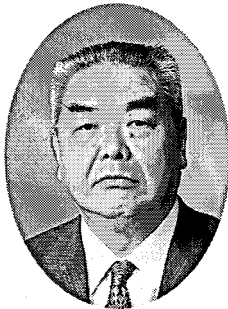
編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名  
(岐阜県百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL 0575-28-3111  
振替名古屋637909

## 飛驒の陸封文化は

(社) 高山市文化協会会長

小鳥幸男



「当国の儀は、余国に勝る難儀の国柄に御座候。仔細は、南は御嶽、東は乗鞍ヶ嶽、北東は笠ヶ嶽、鎗ヶ嶽、立山の続き、西は白山其外四方高山立ち切り、至って土地高く、殊に

洞々谷々にて、秋は雪霜早く降り、春は三月ならでは雪消えのき不申候、作法の儀も都て一作にて御座候。尤麦作少々仕付候村方も有之候得共、三ヶ年に一ヶ年ならでは熟実不仕、百姓渡世難儀の国柄に御座候御事。」とは、安永二年(1773)大原騒動に際して、江戸在留の百姓、牧ヶ洞善十郎等六人が、駕籠訴を謀って認めた願書の一節である。

この一文が適切に表現しているように、飛驒は山国である。他国から飛驒へ入ろうとすれば、必ず幾つかの峠を越えなければならない。それは東西南北どの道をとっても同じことが言える。

朝廷が七道を置いて、全国を統治した際、飛驒の国は東山道に組み入れられた。都を出て近江、美濃、飛驒、信濃…と続くこの道は和銅六年(713)吉蘇路の開通によって、美濃、信濃という流れとなり、飛驒は東山支道として残された。

当時の道は、単にミチの役目を果たすというよりは、中央政府の行政の用を主眼として設置された。したがって、道は、あらゆる情報の流通を機能していた。その意味では、東山道は、信濃から毛の国、みちのくと通うすべての情報が、飛驒を通過しなければならぬ制度であったが、東山支道として美濃から

飛驒へ枝分かれすることによって行き止まりの道となり、飛驒以外の情報は流入、通過しなくなった。

経済活動が盛んになるに従って、都の文物が交流するようになる。平地の国なら、例えば都で需めた十の物を、人の背や馬の背で十自分の国へ運ぶことができた。しかし、四方峠に囲まれた飛驒は、そのことを峠が遮った。飛驒人は荷を減らすたびに「良いものとそうでないもの」「大事なものと大事でないもの」の区別を迫られた。この積み重ねの結果が飛驒人に「より良質なものを」を選択する目を養わせた。背なの荷を一つ減らすたびに「大切なもの」の確認をした。

こうして入った飛驒の文物は、選りすぐられたもののみであった。飛驒人はこのように勝れたもののみを目にし、使って暮らした。このことは、反対に飛驒から流出しようとする良質の文物の流れを止めた。“峠が守った飛驒の文化”と常々私が言っているゆえんはそこにある。

陸封魚という現象がある。山女魚は桜鱒の陸封型だといわれる。遡河魚のように生活史中に海水中の生活と淡水中の生活とを持つものが、地形の変化などによって淡水中に閉じこめられ、一生そこで生活するようになる現象だという。

“峠が守った飛驒の文化”は、正しくこの陸封された文化に他ならないと思う。“飛驒の陸封文化”と。

その峠が、道路交通網の発達に伴って、次々と消えて行く。安房トンネルの開通を最後に“飛驒の陸封文化”も又消えて行くのか。

# 第24回東海三県博物館協会交流研修会に参加して

日時：平成11年10月28日（木）～29日（金）

会場：知多郡東浦町 あいち健康の森 健康科学総合センター

愛知県担当の平成11年度交流研修会は、岐阜県から16名、3県では70名の参加により開催された。

第1日目 10月28日 13:30～19:30

- ・記念講演 「動物介在療法について  
—介助犬を中心に—」

健康科学館長 高柳 哲也氏

- ・事例発表（マルチメディア時代の諸問題）

「オリジナル作品と高精細画像との間に」

岐阜県美術館学芸部長 古川 秀昭氏

「鳥羽水族館におけるインターネット利用の現状と問題点」

鳥羽水族館学芸員 水越 謙氏

「徳川美術館におけるデジタル化の取り組み」

徳川黎明会専務理事兼総務部長

徳川 義崇氏

- ・懇親交流会

第2日目 10月29日 9:30～13:00

- ・健康科学総合センター健康科学館および知多市歴史民俗博物館の視察
- ・昼食会



事例発表風景

## 講演要旨

### ▽「動物介在療法について」

介助犬による動物介在療法は1987年頃イギリスで始まったが、日本は世界の流れの中で遅れている。動物介在療法は動物介在行動にはみられない精神的作用や身体的・機能的作用の効果がある。動物介在療法に欠かせない介助犬の育成は社会整備の欠如、育成体制の不備など等今後解決すべき課題を残しており、また、介助犬認定の問題も抱えている。

### ▽「オリジナル作品と高精細画像との間に」

高精細画像はオリジナル作品をある意味で優れた質で再現するので、文化財・美術品の

情報化に向け自由な活用ができる。しかし、作品をインターネットで流すときは著作権について細心の注意を払う必要があり、また、高精細画像が全く変化しないのに対し、オリジナル作品の方は徐々に変質していることに留意しながら取り扱うことが大切である。

### ▽「鳥羽水族館におけるインターネット利用」

専用線接続及びダイヤルアップによりインターネットに接続し、Eメールも使用している。ホームページを作成して生涯学習活動にも利用しており、館のインターネット利用の効果と課題についてまとめてみた。

### ▽「徳川美術館におけるデジタル化の取り組み」

収蔵品・写真・名簿などをデータベース化し運用している。平成11年には「電子美術館」を開館し、源氏物語絵巻の調査を進めた。文字情報を含めてデジタル化した資料を保存しているが、画像のデジタル化のメリットをよく考えて進める必要がある。オリジナル作品をしっかりとした上で、メリットのあるものをデータ化して残すことが大切だ。

## 視察報告

### ▽「健康科学館」

からだの科学コーナーでは体の仕組みや働きを、見て・さわって・考えるように展開している。健康の科学コーナーでは、実際に動いて体力チェックしながら学べ、タッチパネルで食生活を分析できるようにしてあった。

### ▽「知多市歴史民俗博物館」

平成11年2月に開館。郷土の民俗・歴史・考古・美術などに関する資料を扱い、海との関わりでまとめている。企画展「仏崖展」では悟りとユーモアが表現された禅図が展示されていた。



知多市歴史民俗博物館にて  
(岐阜県博物館 鹿野勘次)

### 第81回岐阜県博物館協会公開講座報告

演題：「進化論と化石」

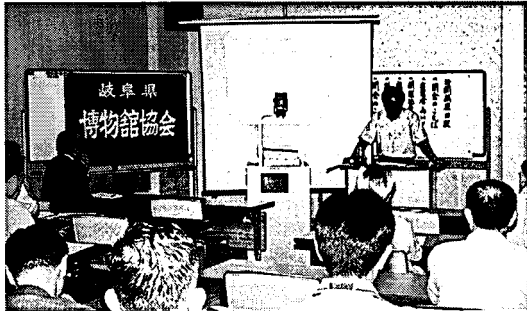
期日：平成11年7月18日(日) 13:30~15:00

場所：瑞浪市化石博物館

講師：名古屋大学人間情報学研究科教授

柴田 博氏

参加：25名



(講演要旨)

現在ほとんど全ての人々が生物が進化するということを信じている。しかし、下等な生物から高等な生物に進化するところを目の当たりに見た人はいない。進化には非常に長い時間がかかっているからである。では、なぜ人は生物の進化を信じることができるのか。それは化石という証拠があるからである。

19世紀初期に、ラマルクの『用・不用説』、キュビエの『激変説』によって生物が進化するという考えが出された。ダーウィンは、1859年『種の起源』で生物は自然淘汰によって徐々に変わってきたと主張した。彼は、化石の記録で祖先と子孫との間で形質が大きく異なるのはそれらの間に入る“中間型”の化石が発見されていないためであり、本来自然界に飛躍はないと考えた。この『漸進説』は進化に関する支配的な考えとなった。

1942年になって、マイアは、進化は急激な変化とそれに続く安定した時期より成るという『断続平衡説』を唱え、『漸進説』を否定した。この説は古生物学者を中心とする一部の研究者によって支持されているだけである。

『種の起源』の出版以来化石の記録は大幅に増えたが、多くの系統で“中間型”の化石は発見されていない。もともとそのような生物は存在しなかったためと考えれば、『断続平衡説』が有利な証拠となる。演者の新生代貝類の進化の研究で得られた結果はこの説によく合う。今後、化石の研究は二つの説の検証に重要な役割を果たすであろう。

(岐阜県博物館 熊崎康文)

### 第82回岐阜県博物館協会公開講座報告

演題：「奥州平泉と石徹白虚空蔵菩薩」

期日：平成11年10月2日(土) 13:30~15:00

場所：白鳥町「道の駅」

白鳥長滝公園管理棟

講師：石徹白大師講代表 上村 修一氏

参加：59名



(講演要旨)

金と馬と海産物によって約百年の栄華を極めた奥州藤原氏は一説では前九年の役や後三年の役の霊を鎮めるため、白山への信仰を篤くし、平泉中尊寺と毛越寺無量光院に白山宮を祀っていたといわれ、白山信仰との深い関わりを物語っている。

藤原秀衡は白山周辺に多くの仏像等を寄進したと伝えられるが、その中でも銅造虚空蔵菩薩坐像(国重文 石徹白大師講蔵)は12世紀後半に製作された岐阜県を代表する仏像である。また、その事実を裏付ける「上杉系図」も残っている。

秀衡の寄進は信仰目的の陰に隠れて、実は源義経の奥州への逃避行を助けるものであったという説もある。秀衡の家来、上杉宗庸が元暦元年(1184年)平泉を立ち、石徹白の地に至った。彼は後に土着したが、これが後の石徹白上杉氏のはじまりである。

この上杉宗庸と彼の家来の小武士集団が義経の逃避行を助ける役目を果たしたという。

この虚空蔵菩薩はもとは石徹白上在所の白山中居神社にまつられていたが、明治はじめの神仏分離の際、仏像や仏具とともに中在所の大師堂と観音堂に移された。廃仏毀釈の影響は白山周辺にも大きな影響を及ぼしたため一般民衆は大師講を作ってこの仏像をお守りしてきた。

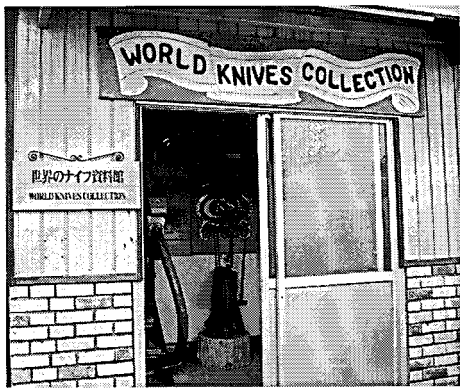
昭和61年には「秀衡800年祭」のため中尊寺からの要請で里帰りされ、多くの方に参拝していただいた。

(岐阜県博物館 鎌田嘉彦)

館・園紹介 No. 110

**世界のナイフ資料館**

〒501-3932 関市稲口町広瀬674番地  
TEL 0575-22-8892

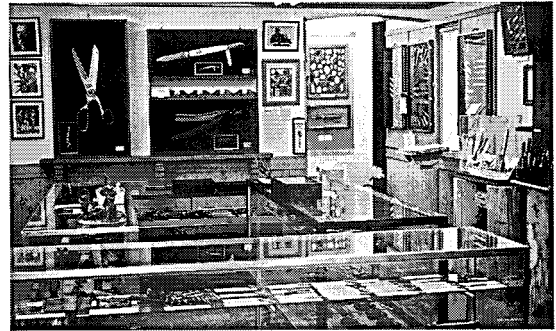


「世界のナイフ資料館」玄関

長良川の支流、津保川の近くにあるナイフ資料館には、オーナーの瀬戸陽一氏が世界中から集められたナイフのコレクションがところ狭しと並んでいます。例えば、中高年の人には懐かしい小刀の「肥後守」コレクション。鉛筆と並んで昔の学生には欠かせなかった必須アイテムの「肥後守」。よくある廉価な小刀と思われがちですがさまざまな形や刻印など、集めれば集めるほどそれぞれに表情があり興味深いとのこと。確かに刃を収納する方向を変えたり、鉛筆の芯を削りすぎないように工夫された「肥後守」を見るとたかが小刀とのひとことで片づけられないほどの奥深さを感じずにはられません。

さて、ナイフというと本来は「切る」ことを目的に作られた物ですが、近代以降その実用的な目的を果たすだけでなく「見る」ことを主眼に置いた、贅沢なつくりのものが作られるようになりました。特に18世紀の産業革命以降、ヨーロッパではさまざまなタイプのナイフが製作され、中には芸術品の域に達するかのようなものも見られます。このコレクションでも多くの貴重な品々を見ることができます。1851年にロンドンで開かれた万国博覧会を記念して作られたしおり付きナイフ、

英国を代表する刃物の産地・シェフィールドで作られた王室御用達のナイフセットなどなど枚挙に暇がありません。



展示室風景

海外へ出掛けられることの多いオーナーの瀬戸氏は、外国でのナイフコレクションの盛んなこととその種類の豊富さ、精巧さに感動され、この資料館を設立されたそうです。日本ではまだまだ未発達のコレクションアイテムの「ナイフ」ですが、この資料館を通してナイフに対する理解と関心を深めてもらい、人々の交流の輪が広がるきっかけとしたいとの抱負をお持ちでした。

刃物ゆかりの町にあり、世界の刃物文化の多様さを知ることができる当館で、多くの珍しいナイフたちを眺めながら先人の知恵や工夫の様子をしのぶひとときを過ごされてはいかがでしょう。オーナーの経験豊富なお話が興味と関心を誘うこと請け合いです。

【アクセス】名鉄新関駅、長良川鉄道関駅  
より車で8分

【開館時間】9:30~17:00

【休館日】なし(年中無休)

【入場料】無料

【ホームページ】

<http://www.spice.or.jp/~seto/siryokan.html>

(機関紙委員 岐阜県博物館 岩佐伸一)

2100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。